

図書寮本惠慶集(501・401)について

— 定家自筆本の原型 —

熊 本 守 雄

又以其本寫之。魚魯草草之
誤可有之。重而得證本可有檢
合而已。

明曆二丙申五月廿四日 激 碧

こゝでいっている、定家自筆本の惠慶集について云えば、冷泉為臣氏編『時雨亭文庫(一)』の第七図に、「定家卿青年期の筆跡」の参考図版として、惠慶集の一面が掲げてある。この本の所藏者等に関しての説明は一切ないが、おそらく、この定家自筆本は冷泉家に伝えられていたものであろう。

定家自筆本惠慶集について知り得ることは、前掲書に参考図版として掲載されている写真一葉が全てであり、この原本を見る機会に恵まれない現在、この本の全貌を知るすべはないが、先の写真の一面は、この小稿で取り上げようとする書陵部藏本惠慶集(501・401)の墨付第六枚・第七枚の見開きの部分に相当する。しかも、その似ぐあいは、敷き写しをしたのかと疑うほどである。(勿論、料紙は鳥りえない)即ち、一面の行数・一行の字数・使用字母については云

惠慶については、『中古歌仙三十六人傳』に「先祖不見。後拾遺集目錄云。稱『播磨講師』。寛和比人云。」とあるのみで、その伝記を詳らかにしないが、彼の家集、及び能宣集・兼盛集・重之集・安法法師集・輔親卿集・夫木和歌抄等によると、大中臣能宣・清原元輔・紀時文・平兼盛・曾根好忠・源重之・源兼澄・安法法師・藤原為頼・大中臣輔親・藤原公任などと交友関係のあったことが知られる。歌僧として広い交友のあったことを思わしめる。

その惠慶の家集は、「惠慶集」あるいは「惠慶法師集」と呼ばれ、群書類従本を初めとして、続国歌大観・校註国歌大系など活字になって最も流布しているものには、定家自筆本をある人が写し、その本を更に写したのだという、次のような奥書がついている。(天理図書に、句点及び返り点は、) 今、私に付した。

或人以「定家卿自筆本」書寫。予

うまでもなく、字形・墨の濃淡・線の太細・筆の疎れ工合・字の大小・各字の前後左右の字との位置関係などに至るまで、寸分も違ふことなく模写されている。

二

書陵部に藏せられている惠慶集の一本(圖書寮501・401)(以下と仮称す)は、群書類従本などの奥書でいう、定家自筆本の極めて正確な模写本だと思われる。

胡蝶装の、いわゆる六半本と称する、樹形本。一冊。題簽はなく、金泥の表紙の中央に、「惠慶集」の三文字が書かれてある。見返しには、銀切箔を置く。

本文料紙は鳥の子で、総紙数31枚のうち、墨付は28枚(その内歌は、第一綴16枚、その内、本文墨付14枚、第二綴15枚、その内、本文墨付14枚)。

一面の行数は、3表・9裏・13裏・20表・26裏の五面が八行書き、1裏・2表・4表・7裏・9表・14表・17裏・18表・18裏・23表の十面は十行書きで、他の三十九面は九行書きである。(書き止め2行)(丁数を示す数字は墨付の丁数。以下同様)

歌は上下句に分ち、二行書きを原則とするが、収まらない場合は、その左行の下方に小さく書いてある。

第二括に綴じ違いがある。23枚目と24枚目との先後は逆でなければならぬ。おそらく、綴じ直しの際に、23枚目の料紙が、一枚一丁の二つ切の片紙であるために、外れてしまい、それを挿み直す時、その位置がずれて、一葉分前に出たことによって生じた錯簡であらう。第二括の内側から三枚目に、この半枚の紙を挿み込めば、正しい順序になる。

第21丁表の1行目迄が定家の筆跡で、2行目から以後は、肉の細

い別筆で書き継がれてある。おそらく、定家筆本の原本に於いても、このような別筆になる書き継ぎを含む形態をとっているであらう。

この別筆になる書き継ぎは、定家の命であり時を隔てずしてなされたであらう。そのことは、定家筆は第21丁表の1行目迄であり、そして、紙面を改めることなく、それにすぐ続けて、2行目から書き継いでいること、及び、この別人によって書き継がれた部分に於いて、それと同筆になる訂正が見られる他に、定家による書き入れ・訂正が十カ所にもわたって行なわれていることなどから窺えるのではなからうか。

その字の使い分けも、みごとに再現されている。

この乙本が、定家自筆本の原型を極めて精密に伝えているであろうことは、同じく定家自筆本をかなり正確に臨模したと思われる、前田家本・上巻(江戸時代初期の書写)、松浦天祥院本との比較検討によっても首肯できる。

三

特に多いという程でもないが、惠慶集に於いても、形態(歌数)を異にする伝本がかなり存在している。だが、管見に入った惠慶集の諸本を書写伝本系統によって分類すると、定家本系統の本と、それと伝本の系統を異にする図書寮本(505・558)との、二類に大別できるように思う。

第一類本(一冊本・古本系統・総歌数二元首)

(1) 書陵部藏本(505・558) A甲本 V

第二類本(二冊本・定家本系統・総歌数二元首)

(一) 上巻(三表首)

A類 三表首本(「よろづよのなみのまなくも」の歌まで)

(1) 書陵部藏本 (501・501) △乙本▽

(2) 神宮文庫藏本 (三門・1102)

(3) 天理図書館藏(竹柏園旧藏)本

(4) 群書類従第六十七册所収本

B類 二九首本 (「見るからにきえこそしぬれ」の歌まで)

(1) 前田家本・上巻

(2) 三手文庫藏本 (申・五)

(3) 山口県立山口図書館藏本

C類 一〇四首本 (「からにしきあはなるいと」の歌まで)

(1) 松浦家天祥院本A巻子本▽

(2) 松浦家天祥院本B冊子本▽

(3) 書陵部藏本 (501・718) △丙本▽

(4) 国立国会図書館藏二十六家集本

(5) 松平文庫藏本 (135・8)

D類 四首本 (「もゝちどりこゑのかぎり」の歌まで)

(1) 松平文庫藏本 (135・9)

(I) 下巻 (一五六頁)

(1) 前田家本・下巻

書陵部藏本 (150・558) (以下甲本) (と仮称す) は、群書類従本など現在流

布の惠慶集が二冊本の上巻に相当する部分のみの残欠本であるのに対して、完本のおもかけを残しその全き形態を保有しているものである。他の諸本が全て定家自筆本の末流であるのに対して、この甲本は、それとは伝本の系統を異にしており、定家本系統でないところの唯一の伝本である。総歌数二九首。第二類の定家本系統の諸本にみられない甲本の特有歌が16首ある。

前田家本は、上・下二冊で 一部の惠慶集をなす。総歌数 二七首 (上巻二九首、下巻三五首)。下巻の、外題及び端首二葉を藤原定家

が書し、他は娘の民部卿局が書き継いだものと称せられる。下巻の第二葉の裏に、定家が自ら筆を下して、

此集若有上下巻歎先年所

持之集有他哥此草子不見

猶可尋之

惠 慶

此集家本依引失隨借出令書寫之處

名哥多不見成奇又借求之處已

半分也仍所書加端也

と記しているところによると、当時の原本が上・下二巻に分れており、上巻の方についても定家が所持することのあったことが知られる。前田本の上巻は、江戸時代初期の名筆家である鳥丸光広・中院通村・小堀政一・松花堂昭乗の四人が、各六枚ずつ均等に紙数を定めて書き継いで新写したものである。定家自筆本をかなり正確に臨写しているようだが、残念なことに、途中(第24丁表)迄で終わっている。24丁裏以後の八面分の書写がなされておらず、未完のまゝで伝わっている。だが、乙本と前田本・下巻とを一組にすれば、完璧な定家本の姿を見ることが出来る。

松浦家天祥院本は、前田本の上巻以上に、定家筆本に似せて書写したものであるが、△150Vの「からにしきあはなるいと」よりければやま水にこそみたるへらなれ」の歌迄で書写は終わっている。しかも、乙本では、△150V迄が定家筆で、以後は別筆だったのに、松浦本では、最後迄定家流の筆跡で徹している。松浦本のこうした形態を見ると、あるいは、このような形態の定家自筆本もあったのではないか、という考えも浮ばないではないが、定家自筆本が、先に書写したものと、訂正の箇所や書き加え等に至るまで寸分も違わないように、二回書写したと考えることの妥当性の小さいことを思うと、松浦本のような形態が生れたのは、定家自筆の部分を探

写するだけで終えることなく、序に、定家が筆を下している面(21丁表)の終わりの歌(△35V)まで、定家流の筆跡で書き続けたため、と考えるべきであらう。

諸本のうち、類従本・乙本・前田本・甲本の四本に限って、その和歌の序列及び有無の表を示すと、次の通りである。(乙本と前田本・下巻との本文に属する歌を中心として作製する。数字は各本の序列番号で、左右同一欄に並ぶのは同一歌であることを示し、○印はその本にはこの歌は存在しないという表示である。略号・類本Ⅱ群書類従本、乙本Ⅱ書陵部藏本(201・201)、前本Ⅱ前田家本、甲本Ⅱ書陵部藏本(150・250)を意味する。(表は次頁)

四

定家自筆本を極めて正確に模写したと思われる乙本には、歌に題が欠けていて一行の空白のある箇所や、歌の二句以下が欠けていて、後で下句を書き込めるように、一行の余白がとつてある箇所がある。(歌は二行書)これは、おそらく、定家自筆本に於いては勿論のこと、定家の臨写した親本に於いても、既に詞書きや歌の語句が欠けていたのであって、それをそのまま、伝えているものであるう。

3 丁裏の△15V「こぐ舟のきしのふち浪たかければまつこゝろをぞよすべかりける」の歌の前に、一行の余白がとつてある。△15Vの歌に詞書きの欠けているのは、系統の異なる甲本を除いて、定家本系統の諸本全てにみられる一つの特徴的なことである。乙本に於ける斯る余白は、定家の臨写した親本に於いて、既に、あるべき詞書きの欠けていたことを意味するものでもあらうか。

定家本とは系統を異にする甲本によって、この空白に補うべき歌

と詞書きのあることが確認される。

△乙本V

<14>
十一月あれたる家女ことづ
くおとにきてとひたり
つゆしもよとまらぬやとにい
とよしくひくことのねにそて
そぬれぬる

<15>
こく舟のきしのふち浪たかけ
れハまつこゝろをそよすへか
りける(3ウ)

(甲本)

(11)
十一月やふれたるいゑ
におとまできてこと
ひき侍ところ
露霜のとまらぬやとにい
とよしくひくことのねに
そてそぬれぬる
またあるところの御屏

(12)
風の哥
中の帖はるのよにたか
よりする人はなをミテ
ゆく

(13)
かりにゆくわれはしたか
ハすゑなから」3ウはな
にこゝろをそえしつる哉
はるのよにこまともは
み侍所
わかくさの野辺においた
つはるこまハいつれのあ
きかひかんとすらん
うミのつらにふちのは
なさけりふねよせて人
おらむと思ひて侍所

(14)
こくふねもきしのふちな
ミたかければまつこゝろ
をそよせておりつる(4
オ)

たれつゝ」の箇所がある。こゝも甚だ紛らわしく、「さへ」の箇所は、うっかりすると、「まつ」と読んでしまいそうな字体で書いてある。その所為であろうか、「きりりくすまつ」と判読して、書写した伝本がかなりある。

この他にも定家自筆本、あるいは、その横写本を転写する際に、先のような定家筆本に於ける紛らわしい字を読み誤らうてであらう、語句の変っている場合がかなり見つけられる。

定家本系統の中に於いて見られる多くの異文も、乙本に拠れば、その異文の発生した原因と、その過程とを知ることができ、その本文を正すことができる。

次に、乙本の8丁裏に、「にほふから」と第一句が掲げてあるだけで、二句以下が欠けており、次のページの9丁表の右端に一行分の余白のつとある箇所がみられる。これも、定家の臨写した親本に於いて、二句以下が欠けていたか、あるいは、判読できなかったことを意味しているであろう。

群書類従本を初めとして定家本系統の諸本全てに、二句以下が欠けている。このことも、定家本の大きな特色である。他方、これと系統を異にする甲本では、次のように下句も整っている。

△乙本V

梅

<40> にほふから

— 8ウ

さくらをそし

<41> 山さくらまつに心をつくして
はおしまむほともいかにせよ
とそ(9オ)

むめ

(41)

にほふかせたくはへもの
ましたるかなたえやつ
まにさすむめにやり

さくらおそし

(42) 山さくらまつにこころを
つくしてはおしまんほと
はいかにせよとそ(9ウ)

なお、国立国会図書館本などになると、△40Vの題と歌の第一句とは、次の△41Vの詞書きと結び付いて、
梅にほふからさくらおそし
山さくら花に心をつくしてはをしまんほともいかにせよとそ
といった異文を作っている。

五

乙本には、行間に「○」の記号の書き込みがある。13丁裏と23丁裏との二箇所に見られる。

その○印が何を意味しているのかということだが、乙本と甲本とについて、歌の序列・有無等と比較検討していくと、その乙本の○の記号のある位置には、甲本に見られる歌の欠けていることがわかり、本来そこに補われるべき歌のあることに気付く。つまり、歌の欠落していることを示す符号の如くである。

その一つは、13丁裏の4行と5行との間に、定家が書いたらしい○印がある。(その箇所と、それに対応する甲本の本文とを対照してあげる。)

△乙本V

おほしまのなるといふ所
にてしほみちつまさきりて

(甲本)

おほしまのなるといふ
ところニしほみちて
とまりてしほのひるま
つとて

<64> 宮ごにといそくかひなくおほ
しまのなたのかけちはしほみ
ちにけり

(65)

みやごにといそくかひな
くおほしまのなたのかけ
ちハしほミちにけり
あまのしほやにとまり
てしほたるゝをミテ

かたらふ人のとをきくに
へまかるにかゝみとらす
とて

<65>

わかるれとかけをほそへつ
ます鏡年月ふとも思わする
な

「13ウ

今一つは、定家筆とは異なる別筆の部分、即ち、書き継ぎのところにみられる。23丁裏の4行と5行との間に、本文と同筆の、細いすっきりした線で、○印が書いてある。

△乙本V

あるところにてなてしこ
をしむ

<120>
心見にかへれはくるしなほ
さりによとやからまじなて
しこの花

あるところすのあしく
さのほたるなつのよの月

(66)

ふるさとをこふるたもとハ
かハかぬにまたしほたるゝ
あまもありけり
あひかたらふ人のとをき
くに、くたるにかゝみを
こゝろさすとはこのぬ
いたてに

続古

(67)
わかるれとかけをハそへつ
ますかゝみ「14オとし月ふ
ともおもひわするな

(甲本)

あるところにてなてしこ
のはなおしむ心

(124)
こゝろミにかへれはくるし
なをさりによとやからまし
なてしこの花

又

いさりふねまかきのしまの
かゝり火に色ミえまかふと
こなつのはな

ある所 すのあしく
のほたる「25オ夏のよの
月 水をも これを

(125)

<121>

あくまでもその月かけ見
るへきにあしのうらはのや
まにかくれて、(23ウ)

(125)

あくまでもその月かけミ
えぬかなあしのうらハのや
まかくれつゝ、(25ウ)

題にて
すのあし

この「○」の符号は、定家の臨写した親本に於いて既に付されて
いて、それを受けて、定家が書き込んだものであるのか、それと
も、定家が後で読み合せ式の校合を行なった際に、歌を書き落して
いたことに気付いて記したものなのか、それとも、書写が完了した
後で、系統を異にする異本(例えば甲本など)を手に入れた際に、
その本文と比較対照して歌の異同を見た時に付したものであるの
か、それは不明である。

だが、先ず、考えられることは、書き落したことに気付いて○印
を付したのであるならば、しかもそれが定家であれば、当然どこか
にその歌を書き込んでいそうなるのだが、(99)(125)の歌は、
定家本に於いては、どこにも見えないのである。

それに、定家の書写した部分にも、又、別人の書き継いだ部分に
も、それぞれ一箇所ずつ、各々の筆で書き込まれていることを考え
ると、この○印は、定家の臨写した親本に於いて、その箇所には歌
が欠けていて、余白があったか、既に○印が付してあったか、そ
れを表わすために、あるいは、それを定家らが忠実に写した故に、
付された○印であると考えるのが、最も妥当なところであろう。

たゞ、このように断言するに際して、聊か気にかゝることがあ
る。それは、後でも触れるが、定家筆本に於いては、甲本系統の本
文と校合したらしい根跡の窺えることである。つまり、少なくとも
一部に於いては異本系統の本文と照合していることは、先の問題と

離れても、頭に置いておく必要がある。

父、そうは云ったものの、異本と照合した結果、乙本の方に歌が欠落しているという事に気付いて、そのことを示すために、○印を記したのだと考える場合にも、問題になる箇所がないわけではない。即ち、異本と照合して、歌の欠落していることに気付き、そのことを示すために、○印を記したのだとするならば、その逆の、乙本に於いて歌の欠落している箇所には、全て○印が記されてあるのかという点、そのようにはなっていないのである。

尤も、その照合が緻密なものではなかったからだ、と云えばそれまでのことだが、乙本に於いて歌が欠落して、○印等のそれらしい標のついていない箇所が、三箇所もあることはやはり問題になる。

① その三箇所を次に挙げる。

△乙本V

月夜にふえふきておとこ

ゆく

新古今

<22> 月影にふえのねいたくす
ぬ也またぬ秋のよやふけ
ぬらむ

山さとの人の家に菊の花
あるしおりてつくるふ

<23>

霜雪にあてぬききより菊花
つくるふ人のそてそつゆけ
き(5オ)

②

△乙本V

正月ついたちころ人く
6ウもろともにはつせに
まいるみちにかすみを見
やりて
霞わけわかかなつみにやとま
らましかすかのへもちか
つきにけり

<32>

おなしころあふみへまか
るみちにかみ山のほと
とにあめにあひて
鏡山こゆるけふしもはるさ
めのかきくもりてやふるへ
かりける」7オ

<33>

おなしころあふみへまか
るみちにかみ山のほと
とにあめにあひて
鏡山こゆるけふしもはるさ
めのかきくもりてやふるへ
かりける」7オ

③

△乙本V

人ともろともにいちはら
のゝ子日

やまさとなる人のいゑに
きくのはな侍へりあるし
おりてつくるふ

(23)

しも雪にあてぬききよりき
くのはなつくるふ人のそて
そつゆけき(6オ)

(甲本)

正月ついたちのほとに人
くもろともにはせへま
うつる道にかすかのをミ
やりて
かすみわけわかかなつみにや
とまらましかすかの野へに
ちかつきにけり

(29) (30)

春日野のわかかなもしるくは
るかすみ」7オかすみわた
れりかたをかのハラ

(31)

正月はかりにあふみへま
かる道にかみ見山のほと
りにてあめにあひ侍りて
かみ山こふるけふしもは
るさめのかきくもりやハふ
るへかりける(7ウ)

(甲本)

人くもろともになのひ
しにやまにまかりて

<35>

ふた葉なるのへのご松にとよせてたかくならむかけをこそまて

(33)

ふたはなるのへのごまつにことよせてたかくならんことをこそまて

(34)

かたをかのはなふりそへん雪わけてみなみさすえにくひすのなく

又

(35)

ふるゆきにはなハマきれてミえねともうくひすのねそしるへなりける」8オ

やまとにまかるにゐてといふ」7ウ所いとおもしろし

るし

<36> 山吹の花のさかりにゐて拾きてこのさと人となりぬへきかな(8オ)

(36)

やまふきのはなのさかりにゐてにきてこのさと人となりぬへき哉(8ウ)

乙本には、甲本の294の歌が欠けている。定家の臨写した親本に於いて、既に、欠落していたのであろう。

六

又、定家本の親本に於いて、既に欠脱していたことの明らかな歌がある。乙本の8丁表8行目の上方に、定家筆の「霞落歎」との書き込みのあることから、そのことは知れる。この注記は、前田・松浦卷子本・松浦冊子本に於いても、全く同様に書写されている。甲本に徴しても、本来はあるべき「霞」の歌が、定家自筆本及び

その親本に於いては、落ちていたのだということ、確認される。

△乙本V

中務の君山さにとゐて春

哥十ありけるを見る

そのたいは ミねのかす

ミ 谷の鶯 残雪 春の

風

むめ さくらをそし

霞落歎

(37)

ミねのかすミ 本
とふ人もなきやまとはいと
しく」8ウはるのかすミ
にミちやまとハ
たにのうくひす

<37>

なきぬやとたちゐまちつる
うくひすは」8オたにのう
ちよりこゑそきゝつる(8ウ)

(38)

なきぬやとたちゐまちつる
うくひすをたにのうちより
けさそきゝつる(9オ)

定家筆本の「霞落歎」という注記は、詞書に「みねのかすみ」とありながら「霞」の歌の見当らないところから、書き添えられたものではあるうが、とにかく、この注記によれば、定家の臨写した親本に於いて、霞の歌が既に欠けて無かったことは明らかである。

他に、乙本の形態についてみる時、定家本に於いて一葉脱葉して

いるのではないかと思われる箇所がある。即ち、甲本と照合し、歌の有無を検討していくと、乙本の19丁と20丁との間に、一葉の脱落があるらしいことに気付く。

△乙本V

十月許はつせにまでゝか
へるに日くれぬればさほ

(甲本)

十月ハかりにハせにまう
てゝかへるミちにさほ山

<96>

山のふもとにやとりて夜
なれはもみち見えぬ心人
くよむに
佐保山の風の心もしらすし
てもみち見すとやこよひあ
かさむ
又のあしたに山きりにか
くれたり

<97>

もみち見にきたる我ともし
らねはやさほのかハきりた
ちかくすらむ」19ウ

(96)

のふもとにやとりて夜な
れハもみちのミえぬころ
さほ山のかせのころもし
らすして」19ウもみちをミ
てやこよひあかさむ
またのあしたに山をミヤ
れハもみちのきりにかく
れたり

(97)

もみちミにやとかるわれと
しらねはやさほのかハきり
たちかくすらん
ふねにのりてやまのモミ
ちミるころ
あきやまにたてらましかハ
なきさこくふなきもいまハ
もみちしなまし

(98)

九月五日あるところのモ
ミちあ」20オはせするに
人くよミ侍へりその題
に
たひのかり よるのあら
し あれたるやと くさ
むらのむし ふかきあき
くさまくらいくよのかすを
むすふらんもみちをとをミ
かよふかりかね
よるのあらし

(99)

わきもこかたひねのころも
うすきほとよきてふかかな
よハのやまかせ」20ウ
あれたるやと
やへむくらしげれるやとの
さひしきに人こそミえねあ
きハきにけり
くさむらのむし
くさかれのほとちかければ
あきのむしやともあらハに
なきよハる哉
ふかきあき
ふかなるにいろとるやまの
こすゑにそあきのふかさハ
まつしられける(21オ)

(100)

わきもこかたひねのころも
うすきほとよきてふかかな
よハのやまかせ」20ウ
あれたるやと

(101)

やへむくらしげれるやとの
さひしきに人こそミえねあ
きハきにけり

(102)

くさむらのむし
くさかれのほとちかければ
あきのむしやともあらハに
なきよハる哉

(103)

ふかきあき
ふかなるにいろとるやまの
こすゑにそあきのふかさハ
まつしられける(21オ)

<98>

紅のいろとる山のこすゑに
そ秋のふかさハまつしられ
ける
(20オ)

乙本に於ける墨付19丁目の裏と同20丁目の表との両面の關係は決して緊密ではない。しかも、乙本の如き歌の序列では、「ふかき秋」の歌は十月に初瀬に詣でての帰途に詠じたことになるが、この歌は、明らかに、甲本に見られるように、九月五日の河原院紅葉合に詠んだ歌である。

乙本や前田本などに於いては、A97Vの歌は19丁目裏で丁度取り、A98Vの歌は20丁表の最初の行から書き始められている。甲本と照合していけば、乙本の19丁と20丁の間に、五首の歌の欠けていることが了解される。五首という分量は、乙本や前田本では、枚数にして丁度一枚に収まる歌数である。

そこで、あるいは、この19丁と20丁の間に一葉の脱葉があるのでは、と考えるのである。(せは、その一枚一丁の片紙の切り口

は、この19丁と20丁との間に位置する。第二節参照。）

その脱葉は何時起きたのかということだが、定家の臨写した親本に於いて、既に、脱葉があったものと思われる。が、そう古く遡ることはないであろう。(なお、ここでは、定家自筆本からの転写本である乙本・前田本・松浦本等諸本全てが同一形態であるものだから、定家書写後に脱落したというケースは一応想定しなかったが、定家自筆本が転写される以前に、定家自筆本に於いて脱葉したということも全く考えられないことではない。)

又、定家自筆本の原型を留めている乙本の19丁20丁の箇所によって、定家が親本の紙面通りに書写したらしいことも、且つ、その親本に於いて脱葉のあったらしいことも窺えるわけである。

(親本に於いて、第二括の内側から三枚目にあった料紙の右半分) (A一葉分) が切断されるか剝離することがあったのであろう。) 定家が親本の紙面通りに書写しているらしいことの窺い知れる箇所としては、他に、9丁裏がある。

△乙本V

をかの松

<43> かたらはむ人もなき哉山さ
とはをかの松風そよりほか

にハ」9オ

<44> 春をあさみ旅の枕を結へき
草葉もわかきころにもある
哉

こひ

<45> ふるさとをこふる本ハき
しちかミおつる山水いづれ
ともなし(9ウ)

(甲本)

をかのまつ

<44> かたはらん人こそなけれ山
さとはをかのまつかせそよ
りほかにハ

たひのおもひ

<45> 春をあさみたひのまくらに
むすふへきくさほもわかき
ころにも有哉

戀

ふるさとをこふるたまもハ
きしちかミおつるやまみつ
いづれともなし(10オ)

9丁裏の右端上方に「の印があって、A44Vの歌に題が欠けていることから、定家が臨写した親本に於いて既にA44Vの題が欠けており、そして、定家はその親本の形態をそのまま伝えるために、紙面も親本と同じになるように書写したのであろうことが推察される。定家本の親本に於いてA44Vの題が欠脱したのは、紙面が改まる際によく生じる書き漏しのためであろう。つまり、その親本に欠脱が生じたのは、その祖本(祖本→親本→定家自筆本)に於いては9丁表の最後の行に書いてあったA44Vの歌の題(甲本によると「たひのおもひ」)を、親本では、同じ9丁表の面に書くことをせず、次のページに回そうとしたが、紙面が変わった時には、祖本の紙面に気を奪われ、題のことはすっきり失念してしまっていて、す、A44Vの歌から書き始めたものだから、題が落ちてしまおうということになったからであるように思う。

おそらく、そのようにして生じたのであろうと考えられる、親本に於いて題の欠脱している箇所を、そのまま伝えるために、定家は紙面の割り振りの親本と同じようにして書写していったものではないかと憶測する。

なお、定家本系統の伝本のうち、書陵部藏本(201・718)△丙本Vが歌の内容から推し量って「若草」という仮りの題を付している他は、諸本全てA44Vの歌の題を欠いている。このA44Vの歌に題が欠けていることも、定家本系統に見られる一つの特徴的なことである。

定家自筆本には、読み合わせや校合を行なった際になされた文字の訂正や書き加えがあったらしく、前田本・松浦本と同様に、乙本でも、その文字の訂正と照合をした際の書き込みらしいものを、そのまま正確に模写してある。

21丁表2行目△36Vの歌以後の、別人の筆になる部分にも、訂正や書き加えがみられる。そこには、本文と同筆になる訂正・書き込みが行なわれている他に、定家筆による文字の訂正及び書き加えもある。定家が子弟に筆写させた場合によく行なっているをそれである。

○ 2丁裏行△10V「七月たなはたまつりミたら^しらる」

「まつり」と「たらる」との間に「ミ」の記号を打ち、その右に「して」を書き加えている。前田本・松浦本（二本共）では「七月たなはたまつりしてたらる」と一行の中に収まっている。

○ 7表2△32V「みちにかずみを見やりて」

「みちにかずみ」を見やりて、^{春日野を}「かすみ」と書き加えている。「時雨亭文庫(一)」には、定家自筆本のこの面の写真が一葉掲げているが、自筆本に於ける書き込みと乙本のそれとは寸分も違わない。松浦本も二本共、定家自筆本と寸分違わないように書写しているが、前田本では「みちに」の下に二字分の余白をとり、その余白の右に「春日野を」と書き加えている。（この箇所は、定家本系統の中に於いても、かなりの異同がある。神宮文庫本は「春日のかずみをミやりて」、松平文庫本は「春日野をかすみにミやりて」、他の諸本は「春日野を見やりて」となっている。）

なお、こうした定家筆本に於ける書き加えは、甲本系統の本文と照合した際の書き込みであろう。（五節参照）

○ 9表9△43V「かたらはむ人もなき哉山さとの」

「の」字の左に「、」を打ち、「の」字の右に「は」を書く。それが松浦本では、二本共、「の」と、「の」字にミセケチを打たないで、左に「は」を書き添えている。他方、前田本に於いては、ミセケチの形は採らないで、「山さとは」としている。ここから、乙本が、定家自筆本の姿を正しく伝えてくれているものであるように感じられる。

○ 12表5△57V「なかつともなくらむとこそまたれつれ」

「つ」字の左に、「々」とや、長めな二線を引いて、「つ」字の右に「け」と訂正している。前田本・松浦本は、共に「またれけれ」としている。

○ 15裏1△73V「衣のすそもそほちはてぬる」

「すそ」の左側にミセケチを施し、右側に「そて」と訂正している。松浦巻子本も乙本と全く同様な体裁をとっている。だが、松浦冊子本ではミセケチが落ちている。前田本に於いては「衣のそても」となっている。

○ 20裏3△65V「むらたつのやとれるやたと見るまてに」

「や」字の右に「え」を傍書している。別にミセケチは打っていない。松浦巻子本は、乙本と全く同じに写している。が、松浦冊子本になると、傍書の「え」字が落ちてしまい、たゞ単に「むらたつのや」とれるやたと見るまてに」となっている。他方、前田本では、「むらたつのやとれるえたと見るまてに」という具合に、乙本で右に傍書してあった「え」の方を本文の中に採り入れていく。ここからも、乙本が定家自筆本の原型を正確に伝えていであろうことがわかる。なお、この「え」の傍書は、甲本系統の本文との校合の際に書き込まれたものでもあろうか。

△乙本V

十二月ある所の哥合せき

せ給しに」20オ

松 にはのむめ 冬月

池のこほり

むらたつのやとれるやたと

見るまてにまつのみとりも

うつむしらゆき (20ウ)

(甲本)

十二月ある所に哥合せき

せたまふ 松の雪

むらたつのやとれるえたと

見るまてにまつのしつえを

うつむ白雪 (21ウ)

<100>

(105)

○ 21表3△133▽「あまのはらそらさへ○やまさるらむ」

定家とは別人の手によって書写された箇所である。「さへ」と「や」との間に「○」印を付し、その右に本文と同筆で「さえ」を補っている。おそらく、書き漏したことに気付いての補入であろう。

松浦卷子本に於いても、乙本と全く同様に、「さへ」と「や」との間に「○」を書き込み、その右に「さえ」と傍書している。前田本では、右に「さえ」を傍書しているが、「○」は付していない。

○ 21裏6△106▽「人もこすとなりたえわたる山さ」と

「たえわたる」の「わ」の左に、「ミ」と定家の筆になるような、肉の太い線でミセケチがなされてある。前田本に於いても、乙本と同様に、ミセケチが打つてある。だが、その姉妹本の三手文庫本、及びその転写本である山口図書館本では「たえたる」となっている。他方、激碧の識語の存する本は全て、ミセケチが無くなって「たえわたる」となっている。

○ 22表1△107▽「なみをさへこそしのくへらなる」

「る」の右に、「れ」字を書き添えている。前田本でも、やゝ右下の位置に下つてはいるが、同様な書き加えが見られる。他本は全て、「しのくへらなれ」とする。

○ 25裏9△127▽ 26表8△128▽

△乙本▽

さうしのゑにすまのうらの
の「25ウかたをかきたる
にかみのやしるにふねよ
りゆく^かなみのたけれはた
よせにみてくらたてまつ
る

(甲本)

障子のゑにすまのうらの
かたかき神の社にふねよ
りゆく人の浪のかゝりけ
れ^かはたよせにふしをか
てみてくらたてまつるを

<127> たよせとはおもはさらなむ
わたつうみにいのる心は神
そしるらむ

(132) たよせとハおもハさらなん
わたつみのなみのこゝろを
か^かもしるらん

<128> しらくもにいろみえまかふ
みてくらをたよせにうけよ
か^かみのこのかみ (26オ)

(133) しらなみにいろひてまかふ
みてくらもたかせにうけよ
しまぬしの神 (27オ)

これらの書き込みは、甲本系統の本文と照合した際のそれである。乙本の本文としては、歌の解し難い箇所とかしっくりしない箇所などについては、異本の本文を参照し、書き添えたものである。「人の」「浪」「鶴主」の三箇所は、定家の筆跡である。

○ 26裏7△129▽「花とよりのいろにくらふる」

「り」の二字を縦の二本線で消し、その右に「はなと」と小さく傍書している。これは、本文と同筆である。

○ 27表4△130▽「もみちてかへらむかたもおほえを」

「ちて」の右に「見」を、「えを」の右に「ぬ」を、それぞれ定家流の筆跡で補っている。これは、21丁表1行目迄の定家の筆跡とは趣を異にしており、やゝ後の筆のようにも思われる。

八

定家自筆本を極めて精密に転写したものと想われる乙本によつて、流布本に於ける誤脱は勿論のこと、系統を異にする甲本のそれをも、正すことのできる箇所が少なからずある。その二三の場合を、こゝでみておきたい。

△乙本V

とやまのゝきはのみちより
りたひゝとゆくかきはら
にかくれぬてゆくかきこ
ゆるやうにするを見て

<119>

見るからにきえこそしぬれ
のきはゆく人はつゆけきみ
ちやわくらむ」23オ

天理本・類従本のような詞書きでは、意味が全く通じない。定家
自筆本の23丁表「行目の一行」「とゆくかきはらにかくれぬてゆく
か」を書き漏したからである。類従本などの、激碧の識語のある伝
本全てにみられる特色である。詞書きの欠脱の過程を示していてお
もしろい。

△乙本V

子日所

<24>
ふた葉よりあひをひしても
見てし哉」5オけふちきり
つるのへのこまつと

人の家のやり水のほとり
に柳さくら

題をれ

<25>
千とせすむ水にかけさす山
吹の花をのとかにおしむへ
き哉
人の家にさくらさきたり

〔天理本・類従本〕

とやまの軒はのみちより
たひゝきこゆるやうにす
るをみて

<119>

みるからにきえこそしぬれ
軒は行人は露けき道やわく
らん

(甲本)

<24>
うちの三尺御屏風の哥
甲帖 ねのひするところ
ふたはよりあひおいしても
みてしかな」6オけふちき
りける野邊のこまつと

<26>

櫻花人の心のわりなきはあ
くともいはしちとせ見ると
も
やり水のつらに山吹おほ
く」5ウきけり水鳥あそ
ふ

<27>

水鳥のなかるゝ河の山吹は
影をのみこそいとふへらな
れ

<28>

月おもしろき夜もみちを
見て人ゝゝゝあたり
もみちはをおしむ心のわり
なきニいかにせよとそ秋の
よの月

<29>

秋の月山にしかなく
秋の夜月見たにもあかな
くに」6オしかのねさへに
なきそふる哉

<30>

秋山のほとりに人ゝゆ
きてもみち見る
紅葉見に草の枕やむすふへ
きけふもくれなはあすもす
くさむ

<31>

田のほとりにかりする人
あり
さなへとりをのかつくらぬ
秋の田をかりにきぬとや田
ぬしとかめむ(6ウ)

(25)

さなへとりをのかつくらぬ
あきのたをかりにきぬとや
たぬしとかめん(6ウ)

甲本にも脱葉・脱落の存すると思われる箇所が若干ある。ここなど、その典型的な所である。

甲本の方には、乙本の△25V△26V△27V△28V△29V△30Vの六首と△31Vの詞書きとに相当する部分が欠けている。一葉分の歌が欠脱しているわけである。

甲本の親本に既に落丁があったのか、それとも、甲本の書写者が親本の紙を二枚重ねて捲ったためかの何れかであろう。

定家本系統の本文によって、甲本にも脱葉・欠落歌のあることがわかる。

△乙本V

とりのこのやうなるうり
をある所にたてまつると
て」15ウ

<76>
わかきみのますへきちよの
しるしにはつるのこにこそ
うりもなりけれ

なてしこをある所にたて
まつる

<77>
山かつのかきほなからに見
るよりハ色まさるへきやと
にうつきむ(16オ)

甲本に於いて78の歌と詞書きとが、ちぐはぐで調和しないから、甲本の本文のみでも、こゝに何らかの誤謬の存することは想像がつくが、乙本によって、そのことは確認される。

「ある所にたてまつる」という詞書きが、△76V△77Vの両方に見られるところから、目移りでもして、甲本では、乙本の△76Vの

(甲本)

とりのこのやうなるうり
をある」16オ所にたてま
つるとて

(78)
やまかつのかきねなからに
みるよりハいろまさるへき
やとにうつきむ(16ウ)

歌と△77Vの詞書きに相当する部分を、書き落してしまつたのであろう。

九

以上、「乙本(図書館、O・E)」は、定家自筆本の原型を伝えている、極めて正確な複写本であろう」ということを示していると思われる点を列挙するという形式を探りながら、定家自筆本の性格、更には、その親本の性格等に関しても、一二臆説してきたわけであるが今一つ、定家筆本の性格に関して、こゝで是非触れておかねばならぬことがある。それは、勅撰集に入撰していることを示す書き込みに関することである。

乙本に於いては、歌は二行に書していたが、その歌頭に「拾」
「後」(後拾遺)「新」「續」(続後撰)の撰集名の注記が、全部で12箇所ある。

- a、4裏2△19V「秋といへはちきりをきてや」の歌に「新」
 - b、5表2△22V「月影にふえのねいたく」の歌に「新古今」
 - c、7裏4△34V「あさち原ぬしなきやとの」の歌に「拾」
 - d、8表3△36V「山吹の花のさかりに」の歌に「拾」
 - e、10表3△47V「さくらちる春の山辺は」の歌に「新」
 - f、12表2△56V「たねなくてなき物くさは」の歌に「拾」
 - g、15表2△71V「萩の葉もやうちそよく」の歌に「拾」
 - h、15表6△72V「すたきけむ昔の人も」の歌に「後」
 - i、18裏4△91V「松風も岸打浪も」の歌に「後」
 - j、18裏9△92V「うへをきしあるしはなくて」の歌に「後」
 - k、20表2△98V「紅のいろとる山の」の歌に「続」
 - l、21表3△99V「あまのはらさらさへさえや」の歌に「拾」
- こうした乙本に於ける注記に対して、松浦本には、a△19Vの歌

に「新」の書き込みがあるだけ。前田本でも、㉔△19Vに「新一」、㉔△34Vに「拾」、㉔△36Vに「拾」、㉔△47Vに「新」、㉔△56Vに「拾」、㉔△98Vに「統」と、6箇所にしか注記がない。

尤も、これは筆者によって書写態度が違ふからのもので、小畑遠州の分担した箇所(13丁~18丁)には、一箇所も撰集名の注記は見られない。前田本で、㉔㉑①①の4箇所に注記が見られないのは、おそらく、遠州が書き漏しただけのことであろう。

乙本に見られる12箇の入撰を指し示す書き込みは、定家筆でもなく、後半(21丁表2行目以後)の別人の筆とも異なる。

前半の定家が筆を取っている部分(21丁表1行目迄)は筆の勢いもあって、非常に滑らかで、且つ、艶の感じさえも受ける。前田本の下巻に於ける定家の筆跡よりも、若い感じである。冷泉為臣氏は「定家卿青年期の筆跡」とみなしておられる。私には勉強年期の筆のように思えるのだが、とにかく晩年の筆でないことは確かである。それに対して、乙本に於ける撰集名の注記の内、㉔㉑の「新」の字には力が入っているが、どこかギクシヤクシヤしたところがある。又、㉔㉑①①の「拾」の字と、㉔㉑①①の「後」の字は、やゝ右下に流れる癖のある筆跡で記されている。

又、前田本の下巻の大半は、定家の娘の民部卿典侍が書写したものと称されているが、そこにも、勅撰集に入撰していることを示す注記が四箇所ある。

○ 17丁表12行

〔187〕新 わかやとのそとにもたてるならのハのしけみにすむ夏はきにけり

○ 18丁表4行

〔195〕後 あさちハラたましくすのうら風のうらかなしかる秋はきにけり

○ 19丁裏1行

〔211〕勅 しもかれやならのひろハをひやくてにさすといそける神の宮つこ

○ 20丁表7行

〔219〕後 いはしろのもりのいはしと思へともしつくにぬると身をいかにせん

これら「後」「新」「勅」の字も定家の筆跡ではなく、又、民部卿典侍の筆とも異なっている。左の方に線が約まり、やゝ右下の方に傾く癖のある字である。まさしく、乙本に於ける注記のうち、㉔㉑①①①①などと同筆である。(前田本の下巻に為されている注記の筆跡とは、全く同じである。)

乙本の㉔㉑①①①①の筆跡は、㉔㉑①①①と、心持違ふような気もしないではないが、ほぼ同筆と認めてよからう。払う線や右へやゝ傾斜する字体など共通する面の方が多い。

乙本の㉔㉑①①①①の筆跡とは異なる。どちらかというところ、定家流の筆遣いである。更に、問題になるのは、「新古今」と注記があるのに、この歌が新古今集に見えないことである。定家も、誰の書き込みであるのか、皆目検討が付かない。果して、自家筆本の原本にも書き込まれていたのか、この点も問題とならう。唯一つ、これらの注記の中で確かなのは、㉔㉑の「統」の注記が、少なくとも、定家没後に書き込まれたものである点である。

定家が没したのは仁治二(1222)年八月二十日であり、続後撰集は、宝治二(1258)年七月二十五日に後醍醐院から為家に撰集の宣下があって、建長三(1251)年十二月に奏覧したものであるからである。

㉔の注記された時期の上限と同時に、下限についても凡その検討

はつく。それは、続後撰集を「続」という略号で指し示しているところから窺えるのではあるまいか。「続」という略号でもって、続後撰集を指し、用を為し得た時期の書き込みであろう。即ち、続古今集の成立した文永二(一一三三)年以前のことではなくてはなるまい。定家の息子の、為家あたりの注記でもあろうか。

ともかく、定家筆本に於ける撰集名の注記の大部分は、定家没後に、現在前田家に伝えられている下巻と、定家自筆本(上巻)とを、共に所有し得た者が為したもののようである。

世に定家自筆本と称され、書写されていった定家筆本は、乙本に見られるように、いろいろと時を異にする書き込みを含んでいるわけである。広く世に伝わったところの一つの形態を持つ迄には、かなり長い年月を要し、幾人もの手が入っているようで、短期間に成ったものではないようである。

そうしたいろいろなものを含み込んだところの定家筆本が形成されていった経過を告げるほど、乙本は精巧な模写本であるといえようか。

更に、そうした、定家自筆本を極めて忠実に模写している乙本によつて、惠慶集は定家自筆本まで、遡ることができる。更にその乙本によつて、定家自筆本の親本の姿をも想像できるように思われる。そして、ほとんど世に流布することなく、書写階梯の極めて少ないと思われる甲本の存在することと相俟つて、現存諸本が一つの惠慶集原本から発しているらしいことも知られるのである。

〔付記〕この小稿を草するに際して、種々御指導御配慮をいただいた金子金治郎先生・稲賀敬二先生に対し心から厚くお礼申しあげます。

又、公私図書館・文庫の方々にも、大層御世話になりました。合せて厚く御礼申しあげます。

なお、この小稿では、甲本を古本系統と称するのみで、何らその理由・性格等については述べなかつたが、書陵部藏本惠慶集(一五〇・五〇)が、定家本以前の古本の姿を伝えているであろうことなどについては、別に稿を改めて詳述する予定である。

— 広島大学大学院学生 —